

聖書：マタイ6：1～4

説教題：隠れたところで見ている父

日時：2018年6月17日（朝拝）

今日の6章1節からしばらく語られるテーマは「善行」です。具体的に3つの善行が取り上げられます。まず最初は2～4節の「施し」。2つ目は5～15節の「祈り」。そして3つ目が16～18節の「断食」。これらはユダヤにおける三大徳目と言われ、それぞれ対隣人、対神、対自分に関するものと言えます。イエス様はこれらを否定してはいません。それらは重要なものです。しかしだからこそ逆に私たちに忍び寄って来る誘惑があります。それは1節にある通り「人に見せるために人前で善行をする」という誘惑です。他の人からこのことで敬われたい、信仰に厚い人として尊敬されたい。そういう動機からする。しかしそうしたら天の父からの報いはないと言われていています。せっかく善行をし、人々が高く評価しても、神は評価しない。人々は「この人は信心深い、この人は目に見えない信仰に生きている人だ！」と言って敬服しますが、天の神が見ると、そこに信仰はない。これが問題です。

今日はその一つ目の「施し」についてです。施しはキリスト教において特別に高く評価される善行の一つです。旧約聖書にもたくさんこれに関する勧めが見られますが、その基礎は神ご自身があわれみの神であられることです。神は貧しい者、罪を悲しむ者を見捨てず、御心に留め、顧みて下さるお方。山上の説教冒頭の5章3節にも「心の貧しい者は幸いです」とありました。このようなあわれみの神を知り、神からのあわれみと恵みをいただいた者たちとして、私たちがまた周りの人にそうあるように！と命じられています。神が私にしてくださったことに感謝して、私も他の人に神がしてくださったようにする。しかしここに誘惑が生じます。施しをする人は神との生ける交わりに生きている人で、神に感謝し、神と心が一つになっている人です。自分もそのような信仰的な人間として人々から見られたい。受けるばかりで他人には施さないケチな人間ではなく、神と同じく他者のことも心にかける愛の人として見られたい。そのため2節を見ると、ある人たちは「会堂や通りで施しをする」とあります。しかもその際に自分の前でラッパを吹くとあります。もちろん本当にラッパを吹いたわけではないでしょうけれども、そのようにたとえられる仕方で施しをする。すなわち施しをする時、何食わぬ顔でいながら、心の中では「はい、皆さん！私はこれからこの人に施しをしますよ！私がこうするところを良く見てくださいね！私がこのように貧しい

人を心にかける敬虔な人であることを見逃さないでくださいね！」という思いでいる。こういう人が「偽善者」と言われています。偽善者とは「役者を演じる」とか「芝居をする」という意味の言葉です。実際はあわれみ深い人でも敬虔な人でもないのに、いかにもそうであるかのような振りをし、人々の前で演技している。

私たちはこれを聞いて人のこととして笑えるでしょうか。私たちもそれぞれ自分に思い当たるところがあるのではないのでしょうか。様々な災害に遭われた方への義援金をささげる時、あるいはキリスト教団体のための支援献金をささげる時、私たちは自分がそれをした人であることを誰かに分かってもらいたい。そのためにたとえば設置された献金箱にささげる際、人々がそこを通りかかるタイミングを見計らって、それをする。あるいは宣教団体等に献金する際、ニューズレター等に献金者の名前が載るということに動機づけられてそれをする。あるいはある一定以上献金すると別枠の高額献金者の方に名前が載ることを知り、それによって献金の額が変わって来る。またお金に関することばかりでなく、病気で入院した人々を訪問したり、しばらく休んでいる人に手紙を書いたという場合も同じでしょう。そのことを誰かに伝えて、私はそういうことを行なった人であることを分かてもらいたいという誘惑があるものです。私は困難にある人、弱さを覚えている人に心を配る、愛の人間である。その病気の人の近況報告という形で自分が見舞ったことをさりげなく人々が集まっている前でアピールする。これは非常に微妙なことです。私はそのような報告はしてはならないと言っているわけではありません。問題は私たちの心の中のことです。その動機のことです。そうして誉めてもらいたい、敬虔な人だと認めてもらいたい。そういう思いでそれをするなら、それは自分の前でラッパを吹いていること、自分の善行を吹聴していることになるのではないのでしょうか。

イエス様はそのような人には天の父からの報いはないと言われます。なぜなら、その人はすでに自分の報いを受けているから、と。2節の、報いを「受ける」という言葉は「領収書を出す」という商業用語のようです。人前で人に見られるためになされた慈善は目的をすでにそこで達成していて、その見返りを受けています。つまり領収書を出した。とするなら、どうしてさらなる報いを神から期待できるでしょう。なおかつ受け取ろうとすることは二重取りすることではないのでしょうか。それに私たちがかもし人から誉められるためにあわれみのわざをしたのなら、それは本当に困っている人を思っただけと言うより、自分のためにしただけです。ですから人にお金をあげたというより、お金を出して自分の名誉を「買った」ようなものでしょう。そういう自己利益のための「売

買」をただけなら、どうしてそれが神からの賞賛に値すると考えるべきでしょうか。

イエス様は3節では、人に知らせるばかりでなく、自分にも知らせるな！と言われました。「あなたが施しをするときは、右の手がしていることを左の手に知られないようにしなさい。」 通常、私たちは右手で何らかの行動を取ります。そして左手はそれを見ているという構図です。しかしそうして自分の心に刻むようなことはするな！ということです。私たちは自分がした良いことについてはしっかり自分の心の中のメモ帳に記録します。他人にもできれば記録させたいが、少なくとも自分の心の中にはしっかり記録する。そして折りあるごとにそのメモ帳をめくり返しては、「私もまんざらではない、なかなか信仰的な人間になって来た」と悦に入り、自分にうっとりする。こんな私なら将来の報いはどんなに素晴らしいだろうと思う。しかし私たちの心の中のメモ帳は最後の日に神が開かれる書物とは大いに違うものです。その例がマタイの福音書 25 章のイエス様の言葉に示されています。やがての日に私たちは一人一人主の前に立たされます。そしてある人々に主は 25 章 35～36 節のように言われます。「あなたがたはわたしが空腹であったときに食べ物を与え、渇いていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、わたしが裸のときに服を着せ、病気をしたときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからです。」 これを聞いてその人々は 37～39 節でこう言います。「すると、その正しい人たちは答えます。『主よ。いつ私たちはあなたが空腹なのを見て食べさせ、渇いているのを見て飲ませて差し上げたのでしょうか。いつ、旅人であるのを見て宿を貸し、裸なのを見て着せて差し上げたのでしょうか。いつ私たちは、あなたが病気をしたり牢におられたりするのを見て、お訪ねしたのでしょうか。』」ここに示されていることは、彼らの心の中のメモ帳と主の書物とは一致していないということです。彼らのメモ帳には主が言われたようなことは記されていません。私たちはいつそんなことをしましたかと彼らは問うています。しかし主の手帳にはそれがしっかり記されているのです。これと反対のことが 41 節からの部分にあります。そこではさばかれる人々が 44 節で「いつ私たちはお世話しなかったのでしょうか。」と言います。彼らのメモ帳にはそんなことはないのです。しかし主の書物にははっきり、彼らは本当の善行はしなかったと記されている。私たちはたいてい自分のメモ帳には自分に有利に書き込むものです。ですからそれに頼って自己満足していると非常に危ない。最悪のケースはこれです。人に見られるための善行を積み重ね、その報いをしっかり受け取っているのに、そのメモ帳には「私はこれこれのキリスト教的善行をしたから将来の報いに値することは間違いない」と書き込まれていることです。しかしやがての日に主の前に立つ時、それは神の賞賛に値する

ものではないことが主によって宣言される。おまえは報いをすでに地上で十分に受け取っただろう。なのになぜさらにわたしから報いがあるかのような顔をしているのか。それにおまえがした善行は人に見せるためのものであって、わたしが賞賛するものでは全然ない！そのようにやがての日に言われて初めて目が開かれる。果たして私たちの善行はどれだけ、神の報いに値するでしょうか。主の前に立つ時、何か残されているものがあるでしょうか。

どうすれば良いのでしょうか。イエス様が言っていることは4節にあります。それは隠れたところで見ている父なる神の前で生きることです。私たちはつい目に見えない神の目を気にするよりも、目に見える人の目を気にかけてしまいます。そして人からの評価や賞賛がないと手応えがないと感じる。骨折り損のくたびれ儲けだったように思う。しかしそんな私たちにはイエス様は、天の父がすべてを見ていると言っています。人々が誰一人気がついていないところでも、その隠れたところで神は見ておられる。しかも神は表面だけではなく、私たちの心の中まで、その動機までも見ておられます。先の章で見た「殺してはならない」また「姦淫してはならない」という戒めも、心の中にまで関わることが語られました。果たしてこのすべてをご覧になっている神の前で私たちはどうでしょうか。偽善者の生き方ばかりがそこにあるということはないでしょうか。

私たちはこの神にこそ目を上げて基本に立ち返りたいと思います。なぜ私たちは施しやあわれみのわざをするのでしょうか。それは決して神の前での点数稼ぎや自分の救いのためではありません。先に見たように、私たちの善行は神に対する私たちの感謝の応答です。決して神との取引ではありません。私たちが善行をして、神がそれに応えるのではなく、神がまず先に私たちに大いなる恵みをくださいました。御子イエス・キリストを私たちに与え、この方であってすべてのものを私たちに与えてくださっています。この神に感謝し、この神への感謝の応答として私たちは施しやあわれみのわざを真心からささげるのです。ですからそこに人に見せようとする思いを入れるべきではありません。その誘惑に屈してはならない。神が見ています。その方に喜ばれるように！ということにだけ思いを向けて取り組めば良いのです。

そしてここにある素晴らしい励ましは、そこには報いも約束されていることです。私たちの善行は神の恵みに対する感謝の応答なのですから、それがなされたら、それで終わりでも良いはずですが。神が報いをつける必要はありません。しかし神は私たちの感謝の

応答をご自身が非常に喜んでおられることを示すために、さらに報いをつけて下さるといいます。またそのことによって私たちが益々善い行ないへ駆り立てられるように励ましてくださっているのです。その報いとは何なのか詳しくは語られていません。それは神がプレゼントして下さるものですから、その内容は神にお任せします。ただそれは恵み豊かな神が現して下さる喜びですから、とてつもなく豊かなものになるだろうと想像することはできます。神は御心により、この世においても、そして来たる世においても、そのことを現わしてくださいませ。私たちはこの基本に立ち返りたいのです。

人の評価を気にすると、私たちは疲れます。人に見られなかったら私の善行はほとんど意味がないと考えれば、どうやって効果的に人に見られるようにするか、どうやって印象的に人の目に映るように行動すべきか、腐心することになります。そこには不自然な動きや偽善があるだけです。そしてそれは演技ですから疲れます。また思った通り相手が反応してくれないと不満や苛立ちも出て来ます。しかし私たちが今朝、改めて心に留めたいことは、天の父なる神が常に見ておられるということです。隠れたところでいつも私を見ておられる。誰も気づいていないその場所で天の父は今この瞬間も、その子どもである私たちの一挙手一投足を大きな関心をもって見ていてくださいます。私たちはこの神を見上げ、この神への真心からの感謝の歩みを、この神の前にささげたいのです。そして私たちのその応答を心から喜んで、報いまでつけて下さる父なる神との豊かな交わりの中を歩む者とさせていただきたいと思えます。